

村瀬健さん講演会

「今、多様性を表現すること

— テレビドラマはどこへ向かうのか」

国際日本学部 国際文化交流学科 熊谷謙介

コース演習（文化交流コース）は、国際日本学部・国際文化交流学科で文化交流コースを選択した2年生全員が履修する科目です。「共生」や「文化理解」をキーワードに、日本をはじめ世界のさまざまな地域に至る文化を、歴史や宗教といった多様なアプローチで考えるのですが、発表やレポート作成を通じて、発見したことを他の人に伝えるスキルを身につける実践も大事にしています。

この文化交流コースで大事にしているものとして「多様性」があげられます。その一方で、世間でよく使われている「多様性」は一種の流行語になっており、これからの時代に必要なものとされているけれど、その内実はよく分らない……というのも現状だと思います。

このような想いから、今回、コース演習Ⅱ（山本信太郎先生、前川理子先生、角山朋子先生、熊谷が担当）では、フジテレビジョンのドラマ・映画プロデューサーである村瀬健さんをお招きし、講演会を開くことにしました。村瀬さんの代表作

である『stark』は聴覚障害をテーマにしたものとしてしばしば紹介されていますが、けっしてそれだけの作品ではなく、愛やコミュニケーションなど、誰しもが感じる思い悩む問題がからみあって描かれています。このような作品を生み出した村瀬さんの想いとはどのようなものか——、「多様性とは何か」を根源から考えながら表現活動を行っている村瀬さんの考えをお聞きしたいと思い、ご多忙の中ではありますが、講演をお願いさせていただきました。またご著書『巻き込む力がヒットを作る。想いで動かす仕事術』（KADOKAWA・2023年）で示されるような、チームで仕事を進めていくための方法論や経験談なども、これから仕事をしていく学生たちに教えてください。くださればと思いました。



本講演会は人文学会に主催をしていただき、公開いたしました。授業を履修する学生だけでなく、学内の学生たちも積極的に参加してくれたのはうれしかったです。

まず村瀬さんからドラマプロデューサーの仕事の紹介があり、自身のプロデューサーとしての仕事は、脚本や演出、キャスティング、映像表現な

などをすべて把握しながら、企画からはじまって作品全体の方向性を導いていくという役目をこなしているとのことでした。日本のドラマでは俳優や脚本家の存在が目立ちがちですが、作品の主たるカラーを決めるプロデューサーの役割はきわめて重要で、それが村瀬さんの具体的な活動も示しながら紹介されました。

次に、『14才の母』(2006)や『海のはじまり』(2024)にわたる村瀬さんがプロデューズした作品群、とくに『silent』から具体的な場面を取り上げ、その背景などを示してくれました。川口春奈、目黒蓮演じる主人公二人だけでなく、とくに夏帆演じる生まれつきのろう者の役など、周辺の人物たちのストーリーを大事にしている点が印象深く、またろう者に失恋という筋書きをたどらせることで、「障害のある人」かわいそうハッピーエンドで救う」というバイアスを含んだ方程式を回避し、よりリアルなラブストーリーにできた、という点は、ドキュメンタリーやヒューマニズム的なフィクションの限界をこじあけるという点で興味深いものでした。

司会による質問にも丁寧に答えてくださり、そのなかでも映画、とくにサブスクリプションによる映像コンテンツとの競合の問題については、地上波のテレビドラマという枠によって、ゆるやかな関心のある視聴者も呼び込むことができることを、強く主張されていました。

最後には「仕事を楽しみ、幸せを感じる経験を



すること」など、熱いメッセージも用意していただきました。これから仕事をしていく学生たちへのメッセージではありますが、教員はじめ、すでに仕事についている多くの人にとっても刺さる言葉であったと思います。学生たちの質問にも誠実に対応してくださり、講演会後に質問に来た学生に対しても、親身に相談にのってくださったこと

が印象深かったです。

最後に、今回の講演を聞いた感想を一部取り上げて終わりにしたいと思います。村瀬健さんの講演をもって、学生一人ひとりがそれぞれの「想い」には、大きな「よろこび」があることを発見してほしいと、切に願っています。(熊谷謙介)

・今回の講演を通して、改めて多様性とは何なのか考える良い機会になったと思います。そもそも現代の多様性とは何なのか、私たち一人一人が違う考えを持つと思います。人種や性別の前に、私たちが違う考えを持った人たちを尊重することが大切だと思います。

・自分の中でプロデューサーという仕事が曖昧だったため、今回の講演を聞いて人それぞれではあるが作品にとっても関わる職業なのだ実感した。そして楽しくいうお仕事をしているのが印象に残りました。来年から就活を考え始めなければいけないという時期ですので、楽しんでいうお仕事をしているのはとても理想的だなと思いました。好きなことを仕事にしたら好きではなくってしてしまうことをよく聞くため、自分が好きなことを仕事にしまい、それを嫌いになつたらどうしようと考えていますが、村瀬さんの話を聞いてこういう考え方もあるのだなど、仕事について違う見方を取り入

れることができました。

・今回の講演を通して、村瀬さんがドラマ制作において「利益や視聴率を最優先にせず、自分の信念や伝えたい思いを中心に据える」という姿勢を貫いていることに強く感銘を受けた。テレビ業界は数字がつきまとう世界だとイメージしていたが、村瀬さんはそれらに振り回されるのではなく、作品そのものが社会に伝えるメッセージを問い続けることを大切にしていた。その姿勢から、これから社会に出る自分自身にとっても、目先の評価に惑わされず「自分は何のためにその仕事をするのか」を問い続けることが、良い仕事へつながるのだと深く考えさせられた。

・講演全体を通して感じたのは、「価値観の押し付け」こそが多様性を狭めてしまう最大の要因だと考えている点である。たとえばドラマ「silent」の制作過程において、障がい者を「幸せに描けば良い」という単純な構図ではなく、歩み寄りの姿勢そのものが独りよがりになっていないかを常に問い続けていたという話が印象的だった。「…」村瀬さんの言葉を通して学んだのは、どんな事象にも複数の視点が存在し、「最適解」も常に変化しうるということだ。自らの考えを絶対視せず、常に問いを立て続ける姿勢こそ、多様性を実践する第一歩なのだと思う。数多くの作品を世に送り出し、様々な反応

を受け止めてきた村瀬さんの生き方そのものが、その理念を体現しており、彼の価値観に触れられたことは、自分にとって非常に有意義で忘れがたい経験になった。

・私は「信長協奏曲」や「silent」が大好きで、放送当時から何度も見返しているし、友達にもおすすめして見てもらっています。今回、その作品がどのように生まれ、キャストがどのように選ばれ、どんな思いで編集されていたのかを直接聞くことができ、本当に嬉しかったです。特に、聴覚障害者や中途障害をテーマにしたドラマを制作することになったきっかけや、その際に大切にされていた考え方にはとても心を打たれました。私自身も村瀬さんと同じように、障害を持つことは悲しいことではないと思っています。だからこそ、「silent」で奈々が「聴覚障害なのは悲しいことじゃない」と言うシーンが今でも心に残っています。

・村瀬さんは自分の想いを基本に製作されているという点で、そのことを聞いて以前よりもドラマを見てみたいという気持ちが高まりました。村瀬さんの伝えたいこと、視聴者にしてほしいことを受け取り、私たちの周りのことや社会のことを作品を見て考える時間は、とても私たちのためになるし、重要なことだと思います。作品を通して普段考えないことを深く考えたり、新しい知識を得たり、それを周りの人と話

してみたりすることで、私たちが人として成長できる機会にもなります。そういった私たち視聴者への効果から、ドラマも映画も芸術だと捉えることもできると考えました。

・大人になってできる友達はみな同じ業界ばかりなので、学生時代の、全く違う世界に行く友達を大事にした方がいい。その友達の存在が自分の武器になるというお話がとても印象的であった。これまでも漠然と、なんとなくいっしょにいて楽しいから、単に好きだからといった理由で友達は大切にしてきたが、将来武器になるという考えは持っていなかった。今自分の周りにはいる友達は自分と同じ趣味嗜好であったりを持った人ばかりで、ある種似たもの同士で固まってしまっている部分もあると思うため、自分とは違う世界に住む人と関わる機会を増やしたいと感じた。また、それが気軽に、大人になってからよりはるかに簡単にできるのが大学生の強みであり、大学という場が多様性の塊であることに気が付いた。

・講演の中で何度も「僕には特別な才能がない」とおっしゃられました。数々の名作を生み出されるプロデューサーという立場は、人を見る目や、社会に隠されている意見に気付く観察力、自分のセンスを信じる勇氣など、単純には言いまとめられない唯一無二の才能を持っているのだと思います。

・大ヒットドラマの「silent」は、私が高校2年生の秋に突発性難聴を発症して学校生活や、所属していた吹奏楽部の大会メンバーから降りたりと、これまでで一番落ち込んだ時期に私に元気をくれた作品でした。耳が聞こえない中で感じる他人の目や孤独感、すれ違う気遣いが丁寧に描写され、共感する中で、耳が聞こえなくても楽しいことがあると改めて教えられた。大好きな作品です。

・今回村瀬さんのお話を通して、テレビ番組や映画製作の裏側にある「熱量」や「こだわり」を強く感じました。良い作品を作るといふことだけではなく、自分の中にあつた疑問やモヤモヤとする気持ちを第一に考え製作しているということに驚きました。村瀬さんは日常から奥さんとよく会議のように色々な話をしていると仰っていたのですが、それは村瀬さん自身が様々なものに視野を広げているからこそ成立していることであると感じました。私たち文化交流コース生も学生自身の興味関心のあることだけではなく、知らないことに対しても知ろうという努力・意識が必要であると感じました。私も村瀬さんと同じく音楽が大好きなのですが、自分の好きなことも仕事の一部として制作に携わっていることが羨ましく思いました。今のお仕事が非常に楽しそうで、私も自分が心から楽しむことができ、生き生きとできるような職業に就きたいと思いました。

今回の記事の一部は、神奈川大学国際日本学部

HPのnoteに掲載されたものです。転載を認めていただいた国際日本学部にお礼申し上げます。
https://note.com/kanagawa_cj/n/n6658d17634d8



デジタルドラマ・映画プロデューサーとして、「silent」「海のはじまり」など数多くの作品を生み出してきた村瀬健さんをお招きし、「想い」を共有しながら斬新な作品を制作していく仕事術についてお話をうかがいます。

➢日時：2025年10月24日(金)10:50～12:30

➢会場：神奈川大学みなとみらいキャンパス 3008教室

➢主催：神奈川大学人文学会

➢国際日本学部・コース演習の授業内の実施ですが、一般にも公開します。参加ご希望の方は下記のリンクまたはQRコードから10月22日(水)までご連絡ください。
<https://forms.office.com/r/iNpdXNud6B>

問い合わせ先：熊谷謙介(神奈川大学)

村瀬健さん講演会
「今、多様性を表現することーテレビドラマはどこへ向かうのか」